



老人譚



川崎ゆきお

「あれはいつ頃からだろうかなあ」

老人が昔話を始めた。

「どんなお話ですか」

「いつ頃から老人になったのかを考えていた。いや、思い出していた」

「それは、年を取ったからでしょ」

「老人の年になる前から何となくその前触れのようなものがあった。しかしそれは意外と十代のことなんだなあ」

「十代と言いますと」

「半ばか」

「はい」

「ほら、よく年寄り臭い青年がおるだろ。子供でもよい」

「ああ、いましたねえ」

「大人よりも年寄りに憧れていたんだらうねえ。きっとその連中は。私もそうだが。つまり、大人よりさらにレベルが高いのが年寄りだ。まあ、長老だな。だから、その長老に憧れた」

「はい」

「分かるか」

「何となく。僕にはその経験はありませんが、理解は出来ます」

「だから、その頃は年寄り臭いことを言ったり、考えたりしておったなあ。お墓がどうの、家相がどうの。近くの神社がどうのとな」

「はい」

「そこから一気に年寄りになって行ったわけじゃない。二十歳を過ぎたあたりから普通の社会人となる。そうすると、そんなことも言ってもらえない。まだ若いので長老にはなれんからな」

「当然ですねえ」

「そして、普通の青年になった。その後しばらくは普通の大人だよ。年寄りじゃなくね。発想もそうだ」

「じゃ、いつ頃からお年寄り路線が復活したのですか」

「懐かしく思うようになったからかな」

「昔のことがですか。それはよくありますねえ」

「いやいや、それもあるが十代の頃、なろうとしていた長老を思いだしたんだよ。あのときの路線は残念ながら中断されたが、退職後、それが出来るようになった」

「じゃ、原型は思春期にあったのですか」

「あの頃は選択肢が広く、何にでもなれそうな雰囲気があったからねえ。大人になると、どんどん狭まる」

「では、年寄り臭いとは、どんな臭さですか」

「臭いわけじゃないが、まあ、臭い話が好きになる」

「はい」

「線香臭い話がね。昔からあるようなものをもっと知りたくなった。子供の頃、よく物を知っておった年寄り連中のような知識が欲しい」

「老人の知恵ですか」

「そうじゃない。そんなもの今の時代、当てはまらないだろう」

「はい、じゃあ？」

「訳の分からん言い伝えや、迷信などに興味が走る」

「ほう」

「昔の年寄りが、よくそんな妙な話をしていた。大人になると、それは全部嘘だと分かったんだがね。今はそうじゃない。意外と本質に触れていたんじゃないかと……これは曲解だがね」

「それはどういうことでしょうか」

「語っていることは嘘なんだが、その中に何かがある」

「難しい話ですねえ。それはお年寄りの話とは少し違うような気がします」

「きっと暇なんだろう。余裕が出来た。もう実用的なことはしなくてもいい」

「ちょっと違うような気がします」

「年寄りの心境に入るとは、そういうことではないかもしれんが、今まで無視していたことを、復活させたい」

「え、何を無視されていたんですか」

「だから、迷信とか、言い伝えとかだよ。古くからある伝統でもいい。骨董品でもいい。昔、葬り去られた思想や形式でもいい」

「そのあたり、お年寄りらしいです」

「そうそう、一般的な年寄りだよ。その心境は子供時代に向かっているのかもしれない。あの頃、その扉が開いていたんだよ」

「よく分かりませんが、今日はこのへんで」

「そうだね。こういう話は、何の実用性もないからねえ」

「あ、はい」

了